

新 英 語 学 概 論

A New Introduction to English Linguistics

編 著 者

八 木 克 正

英 宝 社

はしがき

本書は、新しい時代に適応した英語学への入門書です。第一部では、英語がブリテン島にできるまでの経過、それ以後の英語の歴史、イギリス諸島の今の言語の状態、世界に広まった英語の歴史と今の姿を学びます。

第二部では、言語学研究の歴史をたどり、現時点での最先端の言語研究と英語学研究の状況を学びます。そこには、歴史言語学、構造言語学、生成文法、認知言語学、談話分析、さらには、日本での英語学研究の歴史が書かれています。

第三部では、英語の現在の姿を、文、品詞、音声、音韻、談話のレベルに分けて学びます。

第四部では、人はどのようにして母語を獲得するか、人は脳の中で言語をどのように処理しているかについて、最新の研究成果を学びます。

本書を詳しく勉強すると、英語学の世界の全体を知ることができますが、指導の先生方の方針によって、特定の分野を詳しく学ぶこともできます。

本書は、八木克正・吉田和男・梅咲敦子著『英語学概論』の全面改訂版です。旧版出版後の英語研究の発展はめざましく、英語学の守備範囲も随分と広がってきました。その発展に見合った内容にするために、それぞれの専門家に執筆参加いただいて、全面的な書き換えを行いました。

それぞれの担当部分は以下の通りです(肩書は2006年10月現在)。

第一部第 I, II, III 章全体	八木克正(関西学院大学教授)
第一部第 II 章 4	菅山謙正(京都府立大学教授)
第一部第 III 章 5	神崎高明(関西学院大学教授)
第二部第 I, II 章	田中 実(関西学院大学教授)
第二部第 III 章	大室剛志(名古屋大学教授)

第二部第IV章	菅山謙正
第二部第V章	内田聖二(奈良女子大学教授)
第二部第VI章	梅咲敦子(立命館大学教授)
第二部第VII章	住吉 誠(摂南大学講師)
第三部第I, II章	八木克正
第三部第III章	中島直嗣(摂南大学助教授)
第三部第IV章	井上亜依(長崎外国語大学講師)
第三部第V章	内田聖二
第四部第I, II章	門田修平(関西学院大学教授)

本書によって、英語学の全般的知識と現代の言語学の基礎を学んでいた
だければ幸いです。

索引の作成は住吉誠さんをお願いしました。また、出版に至るまで、英
宝社の宇治正夫さんに大変お世話になりました。ここに記して、感謝いた
します。

2006年7月

編著者 八木 克正

目 次

はしがき	iii
第一部 英語の歴史と現状	3
第 I 章 英語前史	5
1 比較言語学とインド・ヨーロッパ祖語の発見	5
2 ゲルマン民族の移動と英語の始まり	9
3 ゲルマン民族の移動とアジアとの関係	10
第 II 章 英語の歴史	12
はじめに一英語の時代区分	12
1 古英語 OE	13
2 中英語 ME	20
3 近代英語 ModE	27
4 現代イギリス英語事情	32
第 III 章 ブリテン島の英語から世界の英語へ	40
はじめに	40
1 アメリカ英語	41
2 カナダ英語	47
3 オーストラリア・ニュージーランド英語	51
4 ピジン・クレオールと世界の英語	58
5 英語の多様性と「正しい英語」	66
第二部 言語研究の発展	75
第 I 章 規範から科学へ	77

第 II 章	歴史主義から構造主義へ	81
第 III 章	言語能力の解明としての言語学	90
第 IV 章	認知と言語	98
第 V 章	文を超えた文法	108
第 VI 章	コーパス言語学	119
第 VII 章	日本の英語研究の伝統	127
第三部	現代英語の意味と構造	137
第 I 章	現代英語の文法 (1) — 文と文を構成する諸要素	139
第 II 章	現代英語の文法 (2) — 品詞とその機能	148
第 III 章	現代英語の音声と音韻	158
第 IV 章	語彙・イディオム・成句表現と辞書	167
第 V 章	語用論的情報の諸相	176
第四部	人と言語	183
第 I 章	人はいかにして言語を獲得するか	185
第 II 章	人はいかにして言語を処理するか— 心理言語学と神経言語学	193
参考文献		203
索引		209

新 英 語 学 概 論

第一部 英語の歴史と現状

第 I 章 英語前史

- 1 比較言語学とインド・ヨーロッパ祖語の発見 5
- 2 ゲルマン民族の移動と英語の始まり 9
- 3 ゲルマン民族の移動とアジアとの関係 10
- 問題 11

第 II 章 英語の歴史

- はじめに—英語の時代区分 12
- 1 古英語 OE 13
 - (1) 概説 13
 - (2) OE の方言 13
 - (3) 歴史的展開と語彙の増加 15
 - (4) OE の文法的特徴 17
 - (5) OE の文字 18
 - (6) OE のサンプル 19問題 20
 - 2 中英語 ME 20
 - (1) 概説 20
 - (2) ME の方言 21
 - (3) ME の語彙 23
 - (4) ME の文法的特徴 24
 - (5) ME の文字と綴り字 25
 - 3 近代英語 ModE 27
 - (1) 概説 27
 - (2) 大母音推移と綴り 29
 - (3) シェークスピアと欽定訳聖書 30
 - (4) ブリテン島の英語から世界の英語へ 30
 - (5) 後期近代英語 31問題 32
 - 4 現代イギリス英語事情 32
 - (1) イギリス諸島内の英語以外の言語 32
 - (2) コックニーと標準イギリス英語 34
 - (3) 河口域英語 35
 - (4) コックニーの発音上の特徴 36
 - (5) 河口域英語, コックニーと標準イギリス英語 37
 - (6) 河口域英語の広がり 38問題 39

第 III 章 ブリテン島の英語から世界の英語へ

- はじめに 40
- 1 アメリカ英語 41

	(1) 概説	41
	植民地時代	41 / 西部開拓時代 42 / 近代 42
	(2) アメリカ英語の方言	42
	(3) アメリカ英語の語彙の特徴	44
	(4) アメリカ英語の発音上の特徴	45
	(5) アメリカ英語の綴りの特徴	46
	問題	46
2	カナダ英語	47
	(1) 概説	47
	(2) カナダ英語の語彙の特徴	48
	フランス語から 48 / 先住民から 49	
	(3) カナダ英語の発音上の特徴	50
	(4) カナダ英語の綴りの特徴	50
	問題	51
3	オーストラリア・ニュージーランド英語	51
	(1) オーストラリア英語の概説	51
	(2) オーストラリア英語の語彙の増大	53
	植民地時代 1788-1850 53 / ゴールドラッシュ	
	以後 1851-1900 54 / ナショナリズム期	
	1901-1944 54 / 現代 1945- 55	
	(3) オーストラリア英語独特の意味の発達	55
	(4) ニュージーランド英語概説	56
	(5) オーストラリア英語・ニュージーランド英語の発音	57
	問題	57
4	ピジン・クレオールと世界の英語	58
	(1) 概説	58
	(2) インド英語	60
	概説 60 / 語彙の借用 60 / 統語法の特徴 61	
	／ 発音上の特徴 61	
	(3) シンガポール英語	61
	概説 61 / シンガポール英語の特徴 62	
	(4) 南アフリカ英語	63
	概説 63 / 南アフリカ英語の特徴 64	
	問題	65
5	英語の多様性と「正しい英語」	66
	(1) 話しことばと書きことば	66
	(2) 地域方言と社会方言	67
	(3) レジスター	69
	(4) ジェンダー	70
	(5) PC	72
	問題	73

第 I 章 英語前史

1 比較言語学とインド・ヨーロッパ祖語の発見

ヨーロッパでは、比較的狭い地域の中で多様な言語が使われています。しかもそれらの言語は、お互いに似通っていたり、無関係と思われるものもあります。そのような中で、それぞれの言語が何か共通の言語から発生してきたのではないか、親族関係を明らかにできないか、といった考え方がありました。

1786年2月2日、カルカッタ（インド）でのアジア学会で、東洋研究家で法律家のウィリアム・ジョーンズ卿（Sir William Jones, 1746-1794）は次のような有名な発表を行いました。

サンスクリット語は、とても古い言語ではあるが、すばらしい構造をなしている。ギリシア語よりも完全で、ラテン語よりも豊かで、そのいずれよりも素晴らしく洗練されているが、動詞の語幹と文法において、ギリシア語・ラテン語に偶然とは考えられないほどの類似性がある。事実その類似性は極めて高いので、言語研究者がその三つの言語を研究すると、それらはおそらく今でももう消滅した共通の源から生じたものとしか考えられないと思うだろう。

ジョーンズは、共通のもとになる言語の存在を主張するだけで満足し、それ以上詳しく研究することはありませんでした。

しばらく時代をおいて、デンマーク人言語学者ラスムス・クリスティアン・ラスク（Rasmus Kristian Rask, 1787-1832）は、1814年の論文（著書として1818年に出版）において、ギリシア語、ラテン語、古ノルド語の音韻の対応関係の法則を明らかにしました。

その後、ドイツ人言語学者フランツ・ボップ（Franz Bopp, 1791-1867）は、1816年に、「ギリシア語、ラテン語、ペルシア語、ドイツ語と比較したサ

ンスクリット語の活用の体系について」を出版し、言語の親族関係を科学的に証明する新しい科学としての比較言語学 (Comparative Linguistics) の基礎を築きました。当時彼は 25 歳でした。

比較言語学者としてのポップは、「いくつかの言語はお互いに多くの類似性をもっている場合があり、その類似性は単なる偶然の結果生じたものではなく、言語の間で借用した結果でもなく、言語普遍的な特徴だということでは説明がつかないことがある」という事実をもとに、「お互いに似通ったいくつかの言語は、共通の源から生まれてきたものに違いない」という仮説を打ち立てました。

言語間の類似性は偶然のこともあります。また、類似性の中には、人間の言語の普遍的な特徴とかそれに近いものであることも考えられます。例えば、「カッコウ」鳥のいる国のほとんどでは、'cuckoo' というようなその鳥の鳴き声からできた呼び名で呼びます。地球上の数多くの言語では、*mama, papa* に類似した幼児ことばがあります。また、言語は一般的に単語や単語の一部、文法規則、表現法などをお互いに借用します。このような借用によって偶然生じる類似性もありうることを考慮に入れておかなければなりません。比較言語学は、言語が生まれてきた過程での親族関係があり、それを科学的に証明できると考えています。

1822 年に、ドイツの言語学者ヤコブ・グリム (Jacob Grimm, 1785–1863) は、ゲルマン語の一つゴート語とラテン語、ギリシア語、サンスクリット語の子音を比較し、ギリシア語、ラテン語の有声音 /b, d/ はゴート語の無声音 /p, t/ に対応し、ギリシア語、ラテン語の無声音 /p, t/ はゴート語の /f, θ/ が対応するといった対応する音の規則性 (後に「グリムの法則 (Grimm's law)」と呼ばれる) を明らかにしました。

ラスク、ポップ、グリムなどの研究を基礎に、アウグスト・シュライヒャー (August Schleicher, 1821–1868) は、生物学者 Charles Darwin (1809–1882) の生物の分類系統図の影響を受けて、インド・ヨーロッパ諸言語の系統図 (Family-tree) の基礎を作り、比較言語学を確固とした学問として確立しました。

比較言語学の研究によって、インド・ヨーロッパ語族に含まれる諸言語

は、今はもう死滅した共通の先祖にあたる言語から生まれてきたことが明らかになってきました。西はアイスランド(Iceland)とアイルランド(Ireland)から、東はインド(India)、北はスカンジナビア(Scandinavia)、南はイタリア(Italy)、ギリシア(Greece)に至るまで、現在使われている言語も今は使われない言語も、主なものを組織的に研究し、その結果、それらの言語は有史以前の、インド・ヨーロッパ語(Indo-European)あるいはインド・ヨーロッパ祖語(Proto-Indo-European)と呼ばれる一つの言語から生じた連続体と考えたのです。

このインド・ヨーロッパ祖語から枝別れしてきた言語で、今でも使われている言語が一つでもあるものをあげると、ゲルマン語派(Germanic)、インド・イラン語派(Indo-Iranian)、ギリシア語(Greek)、アルメニア語派(Armenian)、バルト・スラブ語派(Balto-Slavic)、アルバニア語派(Albanian)、ケルト語派(Celtic)、イタリック語派(Italic)があります。

今世紀になって研究が進み、枝別れが二つ追加されました。そのいずれの枝分かれにも、現在使われている言語はありません。これらは、ヒッタイト語派(Hittite)とアナトリア語派(Anatolian)(紀元前2千年頃、今のトルコのあたりで使われていた言語で、インド・ヨーロッパ語族の中では一番古いとされる)と、トカラ語派(Tocharian)(この言語は、インド・ヨーロッパ語族の中で一番東のもので、紀元千年頃、中国のトルキスタン(Turkestan)が使っていた)です。ヒッタイト語派はアナトリア語派の下位区分とする考え方もあります(例えば、Strazny(2005:510))。

世界には、18ほどの語族(Language Family)があるといわれ、インド・ヨーロッパ語族は、数千の言語からなる一つの語族に過ぎません。しかしながら、現在インド・ヨーロッパ語族の言語を使う人口は、地球の全人口の約半分を占め、中でも英語は、4億の人々の母語であり、英語を公用語・準公用語とする国は54カ国で、総人口21億余(2005年の中央教育審議会参考資料より)の人たちに使われる、世界でもっとも重要な言語になっています。

英語は、インド・ヨーロッパ祖語の子孫です。表1で順を追うと、祖先に当たる祖語の方言の一つが有史以前にゲルマン祖語となり、その方言に

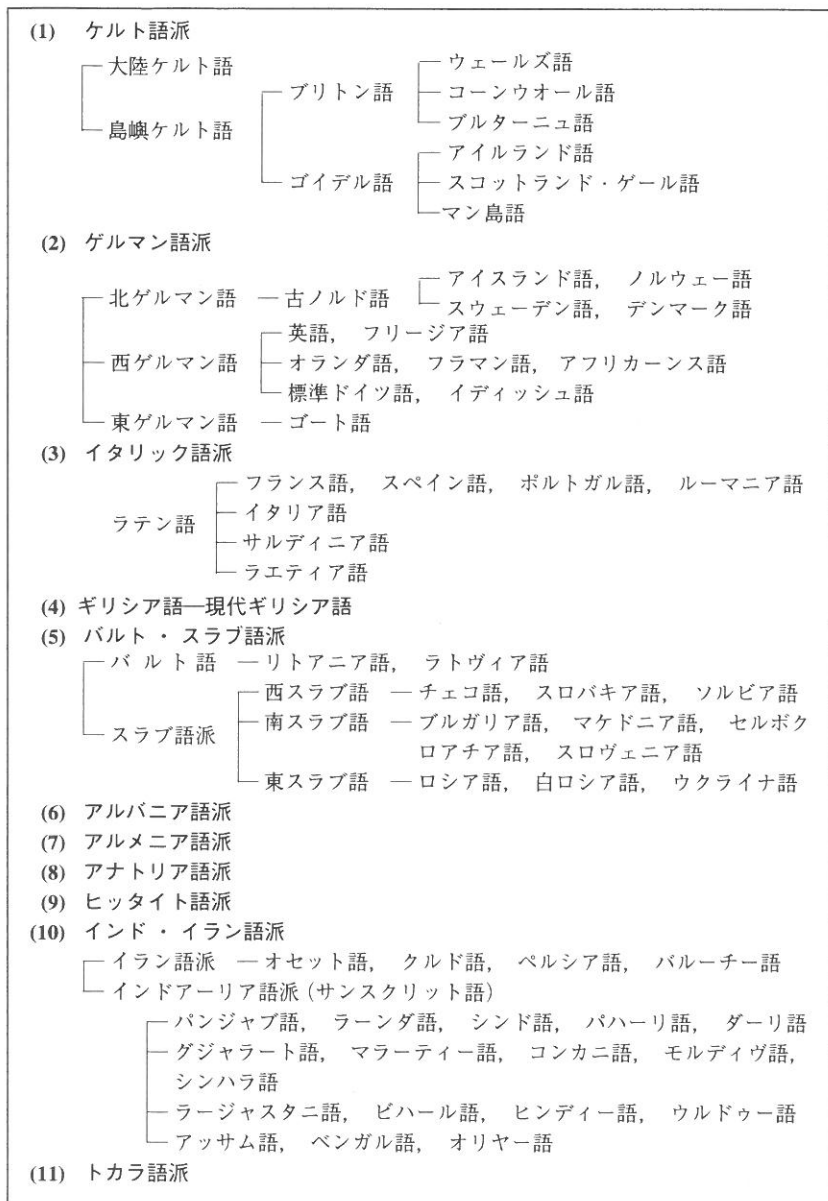


表 1 インド・ヨーロッパ語族の系統

別れ、その一つに西ゲルマン (West Germanic) があります。これがさらにいくつかの方言に別れ、その一つが古英語となって出現しました。

2 ゲルマン民族の移動と英語の始まり

歴史上明らかになっているブリテン島の先住民は、イベリア人 (the Iberians) と総称されています。その後、紀元前7世紀から3世紀頃、ヨーロッパの現在のドイツ、オランダあたりに住んでいたケルト人 (the Celts, または the Kelts) が移動を始めました。このケルト人たちがブリテン島に進入してそこに住み着いたとされています。

紀元前 55, 54 年、ローマ帝国 (the Roman Empire) 皇帝ユリウス・カエサル (Julius Caesar) はブリテン島に侵攻、以後ブリテン島は、ローマ帝国の支配下におかれました。このローマ時代に商都として、またヨーロッパ大陸との接点としての現在の London (London は、語源的には Celt 語) の原型ができ、また、この時代に整備された道路が今でも残されています。

強力な勢力を誇ったローマ帝国は、ゲルマン民族に対しても、帝国内に移住してくることを許可したり拒否したりすることがありました。ローマ帝国には、住みやすい土地と、豊かな食料がありました。寒い土地の住人のゲルマン人は、ローマ帝国に入り、その恩恵にあずかろうとしましたが、それが自由にできなかつたのです。しかしこれも、ローマ帝国の力が強い間のことでした。

ゲルマン民族は、紀元3世紀後半に、第一次のローマ帝国内への移動を行ないました。これはいったん小康状態になりますが、再び紀元378年、第二次の移動が始まり、大挙してローマ帝国に進入、紀元4世紀には、ローマ帝国も徐々に勢力が衰えはじめ、395年に、ローマ帝国は東西に分裂、西ローマ帝国はついに476年、ゲルマン民族によって滅ぼされました。

このゲルマン民族の移動の時期にブリテン島に移動してきたのが、今のデンマークのあるユトランド半島 (Jutland peninsula) に住んでいたジュート族 (the Jutes), アングル族 (the Angles), そして、現在のオランダとドイツ

の北部に住んでいたサクソン族 (the Saxons) でした。特にアングル族とサクソン族は、ローマ帝国の支配下にあったブリテンの南半分に進出し、ケルト人を征服、現在のイギリス人と英語の原型であるアングロ・サクソン民族 (the Anglo-Saxons) とその言語を形成しました。このようにして、ブリテン島のローマ帝国の支配も終りをづけ、新しくアングロ・サクソン民族のイギリスの歴史が始まることとなります。現在のイングランド (England) の名称は、Angle's land (アングル族の土地) に由来します。

3 ゲルマン民族の移動とアジアとの関係

ゲルマン民族の移動はなぜ起こったのでしょうか。寒冷地に住んでいたゲルマン民族が、温暖で食料の豊かな南のローマ国内へと移動したかったというのは、当然その理由の一つです。しかし、この移動に拍車をかけたのが、中央アジアから大挙してやってきたフン族の圧力があったということを見逃すことはできません。このフン族 (the Huns) というのはどういう民族であったのでしょうか。歴史書から引用をしてみましょう。

375年、中央アジアの遊牧民フン族が大挙してヴォルガ川をわたり、サルマティア系のアラン族におそいかかった。これがやがては東、西ゴート族の移動へとつながってくるゲルマン民族大移動の狼煙 (のろし) であった。(中略) フン族の起源は明らかではない。ことに、彼らが中国古代史にあらわれる匈奴 (きょうど) と同一民族であったかどうかについては定説がない。しかし最近では両者を同じものとする東洋学者が多い。その説によると、前3世紀、漢代の初期に長城が完成すると、それまでもっぱら中原への進入をねらっていたフン族は、一転して西方に進路をかえた。これが中央アジアの草原民族に大移動を開始させるきっかけとなった。そしてフン族自身も、紀元後1世紀の末には、アラル海から西方にひろがっていたアラン族に接触するようになる。2世紀には彼らはヨーロッパに達し、アラン族の一部を征服した。355年、彼らはさらにアラン族の他の部分をおそい、372年にはヴォルガをこえる歴史的な行動に出たのであった。(堀米庸三『世界の歴史3・中世ヨーロッパ』中公文庫)

このように、この漢時代の中国の勢力の拡大と、ゲルマン民族の移動、ひ

いては西ローマ帝国の滅亡とは無縁ではありません。漢時代と当時の日本との関係を考えると、歴史は、当時からユーラシア大陸全体として動いていたことがわかります。

問 題

1. 「漢字」, “Japan” ということばの語源を調べなさい。
2. グリムの法則とはどのようなものであったか、調べてみましょう。また、グリムの法則には例外があり、それを説明する「ヴェルネルの法則 (Verner's law)」と言われる法則があります。それについては、第二部第II章1に説明がありますので、参照しておきましょう。
3. 『言語学大辞典』第1巻【世界言語編】(三省堂)の「序説」をみて、インド・ヨーロッパ語族のほかにどのような語族があるか調べてみましょう。

第 II 章 英語の歴史

はじめに—英語の時代区分

英語の歴史は一般に、古英語、中英語、近代英語（近代英語は初期、後期、現代の三期に分ける）の三つの時期に分割します。

古英語 (Old English. 以下 OE と略す. 450 年頃～1100 年頃)

中英語 (Middle English. 以下 ME と略す. 1100 年頃～1500 年頃まで)

近代英語 (Modern English. 以下 ModE と略す. 1500 年頃～1900 年頃.

初期近代英語 ((1500–1700) と後期近代英語 (1700–1900) に分ける. 1900 年以降は現代英語 (Present-day English) と呼ぶ)

古英語が実際に文献に現れるのは 7 世紀以降ですが、移住がほぼ完了した 450 年頃を英語の始まりと考えることにします。

OE と ME の時期を分ける言語変化に大きな影響を与えた事件は、ブリテン島をノルマン人が征服した事件「ノルマン人の征服 (the Norman Conquest, 1066年)」です。ME と ModE の時期を分ける言語変化に大きな影響を与えたのは、「ルネサンス (Renaissance)」, 「大母音推移 (the Great Vowel Shift)」, 標準英語 (Standard English) の確立などです。

われわれが通称「イギリス」とよぶ国の正式名称は、The United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland, 通常は The United Kingdom (連合王国), 略称は UK です。連合王国の名は、10 世紀に遡ります。この時代は、イングランドを中心とした領土でしたが、その後、1536 年と 1542 年の法令によりウェールズを併合、1707 年にスコットランドを併合、ブリテン島を統一し、The United Kingdom of Great Britain となり、英国人をさして British と呼ぶようになりました。1800 年にアイルランドを併合、1922 年にアイルランド共和国 (The Republic of Ireland) が独立、北アイルランドだけが連合王国に残り、現在の姿になりました。

このような歴史的な事情を理解しながらも、イングランドを地方名として呼ぶ場合以外は、英語を使う主人公としての連合王国の人々を「イギリス人」、その国をさして「イギリス」と呼ぶことにします。

1 古英語 OE

(1) 概説

古英語 (OE) は、紀元 3 世紀のブリテン島 (Britain) の東海岸に現れ始めた侵略者の言語でした。彼らは、ブリテン島を約 350 年間にわたって支配してきたローマ人に代わって、新しい文明を築きました。ブリテン島の西部 (Wales 地方) と北部 (Scotland 地方) を除いた全地域に定住しました。侵略者アングル族、サクソン族、ジュート族 (これらの中で有力なアングル族とサクソン族の名をとってアングロ・サクソン (Anglo-Saxon) 族という呼び名が使われます。彼らの言語は、一つの言語の方言でした。定住地は、ジュート族が南東部 (Southeast)、サクソン族はウェセックス (Wessex)、アングル族はミッドランド (Midland) でした。そして、7 世紀始めまでにケント (Kent)、サセックス (Sussex)、ウェセックス (Wessex)、エセックス (Essex)、ノーサンブリア (Northumbria)、イースト・アングリア (East Anglia)、マーシア (Mercia) の七王国 (Heptarchy) が建国されました。新しい土地での彼らの地理的な位置は、当時から今日まで続くブリテン諸島の地域方言のもとになっています。

(2) OE の方言

OE には標準語は存在せず、ノーサンブリア方言 (Northumbrian)、マーシア方言 (Mercian)、ウエスト・サクソン方言 (West Saxon)、ケント方言 (Kent) の四つの方言が認められています (図 1 参照)。ノーサンブリア方言とマーシア方言は、アングル族が定住したテムズ川 (the Thames) の北の地域の方言で、共通した特徴をもつので、この二つをまとめてアングリア方言 (Anglian) と呼ぶこともあります。それぞれの方言で書かれた文献が残っていますが、現存する写本のほとんどはウエスト・サクソン方言で書かれ



図 1 アングル族、サクソン統、ジュート族の定住地域とケルト語地域

たものです。

先住民のケルト族は、ゲルマン系部族の侵略によりブリテン島の西部のウェールズ (Wales) と北部のスコットランド (Scotland) に追いやられ、さらにはアイランド島 (Ireland) へ逃れました。これらの地方ではケルト族の言語ケルト語 (Celtic) が使われ続け、今日でもこれらの言語の子孫にあたるウェールズ語 (Welsh)、スコットランド・ゲール語 (Scottish Gaelic)、アイランド・ゲール語 (Irish Gaelic) として残っています。図 1 で、北部のスコットランドと西部のウェールズには方言名が記されていませんが、これらの地域は先住民のケルト族の地域であったからです。